緒言

幽學の傳を繙き讀み來り讀み去り、天を仰いで長大息する所が二ヶ所ある。

其の一、

尾藩の家老職大導寺家の次男と云はれる幽學が、十八歳の客氣義憤の餘りとは云へ、藩の劍道指南役を斬り捨てたため、父より勘當を受け、其の際他國の君公に仕へざる誓約を爲し、父より賜はりたる祐國の名刀を手賴として、諸國遊歷に上り、其他の高德碩學について、神儒佛の蘊奥を極め、加ふるに鋭氣剛邁の大才あり、若し幽學をして雄藩に仕へしめ、名君彼の才幹を延ばさしめんか、二宮尊德熊澤蕃山たる敢て難からざるものがあつたであらう。教育者として、社會改良者として、農村指導者として、人道の戰士として、武道家として、一歩も彼等に讓らざるは、幽學研究者の皆一致して主張する所である。然るに幽學は父への一諾を堅く守つて終生他國の祿を食まず、自ら浪人大原幽學を以て任じた。人或は彼を評して

逆境の二宮尊德となすものがあるが、正に適評といふことが出來よう。彼は父への一諾を守り、自ら求めて終生逆境に身を處した典型的武夫である。

思うて茲に至れば、誰か彼の心緒に對し、一掬の涙を流さゞるものがあらう。吾人は幽學の大節高義に三拜すると同時にその悲運なる生涯に對しては哀哭の情禁じ難きものがある。

其の二、

幽學が我が鄉土に活躍せる頃は、所謂天保水滸傳時代で、北總の地は飯岡の助五郎、笹川の繁藏等の亂鬪舞臺となり、風俗は荒み、人倫は地を拂つてゐたのである。彼は此の地を卜し、天人交感の哲理に基いて、理想鄉の實現を志し、爾來二十年間東奔西走着々其の緒に進み、香取、海上、匝瑳、山武、印旛の各郡より、風を望んで來り學ぶ者實に六千人、理想の殿堂將に成らんとする直前、好事魔多しとの譬に洩れず、遂に惡漢の讒訴により、幽囚の身となること實に七年間、門弟等は四散し、世の期待は逆轉し、理想の殿堂は崩壞せざるを得なくなつた。七年後に許されて歸來した幽學は、この慘狀を見て悲憤遣る所なく、寧ろ彼等に鮮血の洗禮を授けて改悟せしめようと悲壯なる決意をなし、遂に「難レ舍者義也」の銘ある名刀を以て自刄し果てた。若し幽學に幽囚の奇禍なく、餘生をその使命遂行に捧げしめたならば、東總の天地に理想鄉を實現することは敢て難事ではなかつたであらう。然らば、我が鄉土は日本の社會史上に不朽の光彩を添へたに相違ないのだ。實に終天極地の恨事とは之をいふべく、吾人が天を仰いで嘆息せざるを得ない所である。

幽學は、平素門弟に語つて、「余一朝瞑する日あらば、墓碑を建つる勿れ、宜しく榊を植ゑよ、人沒して後五十年、荆棘を去り、落葉を拂つて、其の跡を弔ふ者なくんば、語るに足らず。或は百年も經てば自分を慕ひ來るものあらん」といつたといふ。果して然り。彼が安政五年に自刄して以來、茲に百年に近く、幽學の餘德を仰ぎ遺業を慕ふ者陸續として出で來り、彼の研究は次第に盛となり、軈て、日本的となるに非ずやと思はれる。

幽學とは如何なる人物なりや、學說、事蹟等の內容價値如何に關する精密なる研究は、他日博識なる大家の手に大成せられん事を翹望し、余は專ら幽學の本領について自分の信ずる

所を述べんとするものである。

諸名家の幽學評

心理學の一派を開いた人

法學博士　田尻稻次郎

幽學先生が神儒佛を好い工合に調和されまして、農村經營を基礎とし心理學の一派を開かれましたのは誠に有り難いことで、つまり農事を以て忠君愛國の實をあげ、「天命之謂性率性之謂道」――これを本にして說いて居られる。（「簡易生活」）

今後ますゝ光を發揮する人

法學博士　松崎藏之助

幽學先生の如き方が此の世の中に居つて、さうして、田舍の人を集め、田舍の人を養ひ、

田舍の人を薫陶して、其の向ふ所を指導し、又、その爲すべきことを勸めて居るので、これがため、大いに日本の社會、又、日本の國家、又、日本の國民が墮落せず、愈々善くなる所以の道となるであらうと思ふ。……幽學先生が身を殺して仁をなすの行をなされたのは、果して其の時だけで見ましたならばどんな事であつたでせうか。果して金錢上から見て、どんな結果があつたでせうか。何も無いでせうけれども、其の無いのに拘らず、今に至つて益々其の光を發揮しつゝある。又、益々これから其の光を發揮しなければならぬと私は信じまする。（「新富國論」）

逆境の二宮尊德といふべき人

文學博士　白鳥庫吉

大原幽學翁は博學の君子人であり、天性の敎育家であり、農村振興社會改善の先驅者であつた。この點、二宮尊德翁の訓化事蹟に對して、決して劣るものではない。然るに、二宮翁に比して、大原翁の名聲が、從來如何に微々たるものであつたかを考へる時、時代とその環境の關係から、長く地に委して顧みられなかつた偉大なる歷史的人物のため、一掬の涙なきを得ないものがある。しかし、それには各々事情があることを認めなければならない。今、二宮翁と大原翁とを對比するに、前者の事業は極めて順調に遂行せられ、且つ、當時の爲政者の庇護をさへ受けた。然るに、後者は當路者の誤解により大彈壓を受け、その業蹟は蹂躙せられ、且つ大原翁の自刎によつて、未完成のまゝ土に埋れて今日に至つたのである。然しながら、偉大なる精神力とその事蹟とは、必ず何時の世にか芽を出すものである。昭和三年御卽位の大典を行はせられるや、畏くも聖恩枯骨に及び、正五位を追贈せられたのである。今や、鄕黨の人、翁の高風を欽慕して、大原神社建設の計畫中であると聞く。翁自ら豫言せられた如く、歿後百年にて漸く世に現れたのである。その德風、その事蹟の具現せられるのは、寧ろ今後に屬することであらう。（「大原幽學の事蹟」序）

二宮尊德、佐藤信淵と併び稱すべき人

法學博士　河　津　暹

幽學は儒教と佛教と經濟とを結び合せて、其の經濟觀を作り、之に諸方を遍歷してゐた時、學び得た農業經營の知識を利用して、庶民に農業を教へ、利用厚生の道を授けたのであつた。僕は幕末の農政家の中では、二宮尊德、佐藤信淵と併び稱すべき人物であると思ふのであるが、其の學識に於いては尊德翁に優り、經綸の才に於いては信淵翁に優ると思ふ。

（「文藝春秋」昭和十、七）

目次

緒言
・諸大家の幽學評
第一章　幽學の修養……一
第二章　幽學の轉機……九
第三章　幽學の指導原理……二一
第四章　幽學の理想鄕……三一
第一節　幽學東總の地を卜す……三一
第二節　幽學の人物性行……三三
一、異性に對し品行端正なり……三三

二、禁酒の範を示す……三三
三、人生觀を確立す……三四
四、無私無慾の人……三四
五、慈眼愛賜の人……三五
六、靈的活力の源泉となる……三七
七、何事にも徹底的なり……三八
第三節　幽學の教育……三九
一、庶人に天地の和の姿を發見す……三九
二、分相應器量相應の教育……四一
三、改心樓の創築……四六
四、男子大會……四七
五、婦人大會……五三

六、小兒會……五五
七、修學旅行……五五
第四節　幽學の社會施設……五五
一、社會制裁起る……五五
二、先祖株組織……六一
三、共同購買の制度……六五
四、儀式の制定……六六
第五節　幽學の農業施設……六六
一、道德と經濟の調節……六六
二、貯蓄の奬勵……六七
三、子孫三代後の計……六八
四、耕地整理の斷行……六八

五、一般農家の心得……六九
六、二毛作の奬勵……七一
七、苗植付法の改良……七二
八、住宅移轉の斷行……七三
九、建築の樣式を一定す……七二
十、農民の服裝を一定す……七三
第六節　理想國大成の曙光……七四
第五章　幽學語錄……七七
第六章　幽學の自及……八七
第七章　東總の地に小幽學の輩出を望む……一〇七

寫眞目錄

幽學の肖像
幽學自刄の短刀
幽學墓上の榊

寫眞の解說

幽學の肖像

幽學歿後門弟等の描寫したるものなるべし。題字は北雷田尻稻次郎子爵の讃辭である。

幽學自刄の短刀

此短刀は幽學が平素、肌身を離さずに携帶せるもので、其の柄に自刻せる「難舍者義也」の語は幽學の精神を表示するものと謂ふべし。（第六章參照）

幽學墓上の榊

此榊は幽學平素の意思に基き、其の自刄の地に植えたるものである。彼れが「予ガ死後ハ墓碑ノ要ナク、唯ダ一本ノ榊ヲ殖エヨ、五十年後ニ落葉ヲ拂ヒ後ヲ弔フ者無クンバ、語ル二足ラズ。百年ノ後ニ至ラバ、自分ヲ知ル者出デ來タラン」と喝破せしものと傳へらる。（第九章參照）

大原幽學の本領

長戸路政司著

第一章　幽學の修養

幽學の修養は十八歲まで武士の家庭、父母の膝下に於て、鍛錬陶冶を受けたる時代と、其後三十四歲師僧提宗和尙に就き、人は天地の和の別神靈なる悟了に基き、濟世救民の天職把握の時までと、前後二期に分けて之を見るを便とする。

幽學は終生自己の出身を口外しなかつたが、尾張藩の老臣大導寺玄蕃の第二子だといはれてゐる。武士の子として十八歲まで父玄蕃の下に武士的鍛錬を受け、專ら武士的氣魄と武士的操守とを養はれ、加ふるに剛腸、我慢、峻勵、果敢の天禀、劍柔槍騎射一として修めさ

るはなく、火花を散らす猛練習を重ね、技といひ、膽といひ、人物といひ、十八才までには已に萬夫不當の武夫となつたといふことである。

幽學の少年時代の修業方法として、次の樣な言傳がある。

「先生、御幼年の御時、朝七つのときが鳴ると起きて六つまで書物を讀み御城の太鼓を聞くと我部屋へ行きて茶を一杯飲み、袴着物をぬぎて劍術の仕度をして稽古場へ出ると、皆最早揃つて居る所にて、暫くの間動かれぬまで鬪ひ、それより歸りて湯に入る也。其湯に入りて方々をふき抔して居る中が休みの時也。それから朝御膳也。其朝飯をたべて居る中に最早馬の仕度をして來る故、それに乘りて二十町あまり遠き馬場まで行き、何れも外の者に遲るゝを恥と心得、我も我もと先きへ出で、待ち居る所にて、暫く乘りてかへると中食となる也。之より柔術の稽古となりて、投げつ投げられつの稽古、之が暫の間也。それより弓の稽古なり、尤も弓がさきになる事もあり後になることもあり。いづれ柔術の稽古を仕舞へばまた湯に入るなり、それより茶の稽古、其間には手習するなり。十五歳となると鑓の稽古がはいりて習ふこと皆揃ふなり。其通り稽古はげしき故、ひまといふが少しもない。其樣に仕込んだからありがたい事は、何としても困るといふ事がない。誠に大丈夫なり。親の御蔭だ。皆その樣にならなければ一生難儀して仕舞ふの外はない（圖書集卷ノ二）

又先生十八歳にして弓の目錄になりし時、誠に面白くなつて來て、南蠻鐵をすぼりと射貫く抔の時になりては、百本でも千本でも何のそのとなつて面白くてたまらなかつた。其時父が申すには、なんと手前弓をやめたがよからうと云はれて、たゞはいと言つて居たが、腹の中で已められる處でない氣がして、自分の部屋へ行きて唯考へてばかり居た所、父は其模樣を看取りもしたが、ちよいとこいと言つて人を呼に寄越した。それから行きければ手前まづ酒を一つ飲めといつて呉れた。其時父の思召といふものは、はてまだせまいことだと言つて唯笑つて居られた。其樣子イヤハヤ語り樣はない。其時兄が脇に座つて居て、あゝ早く斷念らめればよいのにと言ふ模樣だ、たゞ寛仁大度にして見て居

られた。其味ひは中々口に言ふは出來ないことだ。夫より心を改めてからは、どの樣なことでもぽん〳〵と捨てられずといふことはない樣になつた。」（圖書集卷ノ二）

幽學が十八歳の折、從者を連れて外出中、從者は誤つて其の刀鐺を向ふより來かゝつた藩の劍道師範役某の帶刀の鍔にあてたところが、短慮の師範は大いに怒り之を詰責して止まなかつた。幽學は從者に代つて再三、再四謝罪したが、相手は宥さないので、少年客氣の幽學は義憤抑へ難く、憤然立つて之と鬪ひ、斬り捨ててしまつた。斯くなる以上、武士道は父子恩愛の義絶を命じた。父は涙を振つて、この偉材の子に河内守祐國の大小二振と金三兩を與へ永久に生別を告げた。幽學は離別の情に堪へず、悲憤の餘り將に屠腹せんとして父に諫止せられた。其の時、父は「武士たる者猥りに身を捨つべからず。他國の君主に仕ふる事あるべからず。民家に子孫を殘すべからず。」と誡めた。彼は堅く此の三ケ條を守るべき事を誓ひ、遂に我が家を出たのであつた。

幽學は漸く死を思ひ止まつたが、滿腹の幽愁は去り難く、慈愛の骨肉と懷しき山河とを後に殘し、金三兩と祐國の名刀を唯一のたよりとして、孤劍飄然放浪の旅路に上つた。嗚呼天涯の孤客前途に横はるものは只人情の反覆と世路の險峻とあるのみ。空々漠々、寸前暗黑、彼は失望落魄の極、懦夫として落伍せんか、慨然憤起し、烈士として傑出せんか、これ十八歳の少年に取つては正に危機一髪の時であつた。

然しながら、千金の子は困難に珠玉となる。遂に剛志の少年は決然意を決し、劍を以て天下に鳴らさんと覺悟し、武者修業者となり、諸國巡歷の途に上つた。而して、彼は美濃の國に出で、次いで五幾内を廻り、諸所の名ある道場に於て技を磨き、大和國の或劍道場に入り試合をなした。少壯氣鋭忽ち門弟全部を打ちまくり、爲に遺恨を買つたが、未だ若年のことゝて人情の裏表を辨ずるに由なく、陽に歡待する相手の眞意を察知せず、悠々逗留した。或る日の夕暮、幽學は外出先より歸つて來た處が突然路傍の藪中より、手裏劍を投ずるものがあり、それが左の大腿部に當り、流血淋漓と滴つた。けれども、剛毅の幽學は事ともせず、悠然として歸り、主人に其の狀を語り、「世の中には卑怯者があるものだ。遺恨があるなら何

故堂々名乘りをあげて、尋常に勝負をしないのだ。」といつて其の面前に於て手裏劍を拔き取り席に突き立てたところが、一同皆驚き色を失ひ、一言も發するもの無かつたといふ。

茲に幽學は深く考へ、劍の勝負により一身を損ずるが如きは心なき業である、又遠き兩親に對しても相濟まぬ次第である、これより文を學び道を修め、世道人心に盡さうと轉心し、斷然武術に意を絕ち、劍を深く納め、文化の中心地たる京都を指して上つた。

幸に九條家の家臣田島主膳なる者と舊知の間柄であつたから、文化十一年より三年間、此處に寄寓し、九條家に事へ、其の間中庸、大學、論語、孝經等の儒書を大いに研鑽した。これ十八歳より廿歳までの間である。

文化十三年田島家を辭して、遍く近畿を遊歷し、文政元年高野山に上り、蓮華谷三昧院に於て、佛教を研究すること三年、後長門國の國學者近藤美酒に就いて、神道の大旨を學び、それより丹波、丹後を遊歷し、文政四年廿五才の時近江國伊吹山松尾寺提宗和尙の許に至り、儒學及易學を研究し、居る事一年有餘、此處を去り、近江國に入り、中江藤樹の遺教餘德を尋ね、大に感憤興起した。それは彼が「程子朱子深切の教に縋り、且聞き及び候藤樹先生の教に縋り、」云々と述べて居るのによつて察知することが出來る。後年、彼が長部村を中心として、理想鄕を建設せんとしたヒントは茲に得たかと思はれる。更に再び高野山に遊び、紀州態野に詣で、斯くして諸大家の謦咳に接し、高說を聞き、如何許り開發せられたかは想像に難からざる所である。

彼は亦一面天下周遊により、深く民情風俗を察し、世態人情を學び、政治經濟をも見、又深山幽谷に想を練り、宇宙の姿を眺め、斯くして彼の魂は次第〳〵に天の高きに飛躍せんとし、天保元年に至り三十四歳の時七ヶ年目に再び崇敬措く態はざる提宗和尙を松尾寺に訪ひ、其の超俗高雅の雄魂に觸れた。

第二章　幽學の轉機

偉人の生涯を見る時、大なる轉機のあることに氣付く。人には生涯の或時期を境として、或は心魂高く天に驅け上るものあり、或は使命感に突進するものあり、或は人格性情一變するものあり、茲に凡夫一躍、卓拔の人物に轉換することを發見する。

前章に述へた如く幽學三十四歳の時諸國遊歷の成果を抱き、再び舊師高僧提宗和尚を訪ひ滿腹の修得體驗を披瀝して、其の指導を受けた。

幽學は「口まめ草」に此の間の消息を次の如く言うて居る。

「伊吹山五合目松王寺に至る。七ヶ年めにて師の安否を問はむと、對面して互ひに無事なりしを悅ひ、暫くは言葉も無く、涙心中に滿つるのみ。夜に入れは臥床を共にし給ふ。逗留、僕國々遊歷して御傳授を活用したる事抔語ること終日す。或は道の微味幽玄の、月に日に明らかに知れる所以を語れば、師は悅びの餘り、感涙をつゝみ、宣

玉ひて曰く、汝予が如く隱者に陷ること無くして、世に道を傳へ呉れよかしと宣玉ひける。師の其の志有難くて、僕感に堪へかねて、言を出すことあたはず。唯伏して心中に承受するのみ。師怒つて曰く、汝何ぞ迫るや、其の狹き心もて、いかで世に道を傳ふること得べきやとのみにて言止みけり。こゝに於て僕か心中雲の晴れたる如くに成りて、人の心は天地の和の如くなる所以愈明らかに悟れり。此の節、僕言はずと雖も師ははや僕か心中を察し知り玉ひて大いに悅び玉へり。其夜、子の刻に至りて臥床の中より師改めて曰く、汝明けぬれは早く出立して世に道を施すへし、外に語るへき言半句もなしとのみにて、後は口を閉ぢてもの云ひ玉はず、僕愈師の志を尊敬して益師の志を繼がんと決定しけり。」

これ幽學が僞らざる告白にて、提宗和尙が「悅びの餘り感激をつゝみ「汝予が如く隱者に陷る事なく世に道を傳へよかし」と濟世救民の覺悟を促し、幽學は「師の其の心有難く、感激に堪へ兼ねて、言を出すこと能はず。唯伏して心中承受するのみ。」と深く感動し、師の激勵

弟子の感激、互に語り、互に談じ、夜の更くるを知らず、師弟の胸の琴線の次第に高鳴り、魂魄は互に浪打ち、遂に幽學は、感涙の餘り、師の前に平伏するに至つた。

此の時、晴天の霹靂、和尙は大喝一聲「汝何ぞ迫るや、其の狹き心もていかで世に道を傳ふる事を得べきや。」と。これ正に靈光一閃、幽學が胸中の雲霧は忽ち晴れ、百疑は氷解した「こゝに於てか自分の心中雲の晴れたる如くになり、人の心は天地の和の如くなる所以愈明らかに悟り、」と述べ、後年活動の指導原理たる人は天地の和の別神靈なる自覺、即ち彼獨自の天人交感の幽玄なる妙理が茲に確立せられた。これ朝に道を聞いて夕に死すとも可なりだ。

已に天人一如の人生觀確立し、濟世救民の使命感に奮起した以上は、一刻も孤疑逡巡を許さず、和尙は其の夜床中より容を改め「汝明けぬれば、早く出立して世に道を施すべし。外に語るべき言半句もなし。」と云つて口を閉ぢた。

これ白隱禪師が壯時滿腹の苦悶を藏し深山に巖居する仙人白幽を訪ね、救を請うた際、白

幽が眞觀の仙術を授け、「我今已に公に告くるに一生を用ひ盡さゞる底の秘訣を以てす。此の外更に何をか云はんや。」と云つて目を收め默座すると、白隱も亦涙を含んで禮辭したといふのと同一の境涯であらう。

茲に幽學の大志一決し、人は天地の和の別神靈たりとの信念磐石の如くなり、濟世救民の志念いよ〳〵燃え立ち、師の後姿を拜しつゝ、直ちに靈峰伊吹山を下つた。

これ恰も釋迦が菩提樹下に端座幾年の難行苦行の末、豁然として「一切衆生、悉有佛性」と喝破し、衆生濟度に打ち出でたると、又キリストが四十日間荒野に於て寢食を斷ち、サタンと惡戰苦鬪天來の使命感に打たれ「なんぢら悔改めよ、天國は近つきたり。」と叫び、巷里に躍進したると同一の心境であつたらう。

これ幽學一代の運命を決定せる大なる轉機であり、幽學研究者にとりては、見逃すべからざる分水嶺である。

猶、これより先に二三の小轉機ありて、之が前驅をなして居る事を見る要がある。

前章に於て述べた如く、彼が十八歲の折義憤の餘り、藩の劍道指南役を斬つたため、父より勘當を受け、割腹せんとした事件は彼の精神に空前の衝動を與へ、生れて始めての斷腸事であつたらう。

同年大和國に於て、一道場を破り暗打的に籤中より手裏劍を投ぜられ、將に一命を損せんとした事があつた。其の時劍を以て立つ事を斷念し、專ら文を以て世に立たんことを決意した。是亦大なる方向轉換である。

爾來神儒佛三道の攻究に心神を傾注し、烈火の如く精進した。斯くして彼は次第〳〵に天理人性の玄の玄なるもの、幽の幽なるものを體得した。後年、彼がその生命とせる性理學は次第〳〵に深く廣く强く基礎づけられ、神魂は將に大なる飛躍を爲さんとして、再び偉大なる舊師提宗和尙を訪問した。爆彈は已に點火せられた。師の一喝の下に彼の心魂は俄に天に驅け上り、彼畢生の鴻業たる性理學の樹立、救世濟民の天業遂行の信念は茲に確立したのである。

斯くの如く精神上の轉機は水平線上に立つものには皆有るもので、實に偉人たるや否やは此の種の轉機の有無に係つて居ると言つても過言ではないと思はれる。縱ひ偉人にあらずとも、深く人生を考へ、天理人道に高く想を馳するものは、大なり小なり此の種の轉機があるものである。

左に二三の例を擧げて見る。

西鄕隆盛十三歲の秋、藩學聖堂よりの歸途、學友と決鬪し右臂を切られ、爲めに右手の運動意の如くならず、不具となつた。隆盛歎じて、「武士は武を以て身を立つべきものなるが、自分は誤つて右手を損じ、最早刀槍を以て身を立てる事は出來ない。これからは大いに學を修め、精神を陶冶し、やがて將に將たる器を養成しよう」と、一轉心を爲し、爾來學問と精神修養とに全力を傾注した。これ幽學が十八歲の折道場を破り手裏劍を腿に刺された時の轉心覺悟と同一である。隆盛がその後大人格者となり、未曾有の巨人となつたのも、幼時の不具に感奮興起したのが一因となつたに相違ない。

次に南洲二十三歲の時、再び大なる轉機を來した。當時薩摩藩には幕府の意を迎へんとする俗論黨即ち佐幕派と正義派即ち勤王黨の二派あり、互に論難排擊し、遂に正義派は義憤の逆る所、過激に陷り、却つて俗論黨に乘ぜられ、其の領袖たる島津壹岐、赤山靱負、高崎五郎右衛門等十五名は切腹を命ぜられた。

赤山靱負は家格高く人物非凡、夙に南洲の偉材を看破して居た所から、愈々自裁せんとする臨み、特に南洲を呼び熱涙を以て之を訓戒し、將來の大成を諭して、形見として其の臨終の際着用したる血痕斑々たる肌着を青年南洲に賜つた。

赤山靱負が死を以て示したる訓戒は、力强く南洲の心根に徹し、烈々たる熱火となつて、其の精神を燃やした。僅か二十三歲の青年に過ぎなかつたが天性の熱腸漢たる彼は萬籟寂たる夜一室に端坐し、恩師の血痕淋漓たる形見の襦袢を前に、壯烈なる其の自刄を想起し、其の訓戒を思ふ時、滿身の血は湧き、腸は寸斷せられ、誓つて他日の棟梁となり、英主齊彬公のため、進んでは我が皇室のため、國家のため、其の一身を捧げんと決意したに違ひない。

此の時を境とし、南州の性格言動は一轉したと言はれる。これ正に大なる轉機である。日本三千年來希なる偉材巨人の精神上の基礎は茲に確立したと言ふも過言ではない。これ正に幽學が三十四歳の時、提宗和尚の一喝の下に一身の根本轉機を爲したと髣髴たるものがある。

又源頼朝が、父は亡び鄕黨は四散し、平家の勢威は旭日冲天の有樣となり、ために已は天下身を容るゝ處無く、纔かに伊豆の伊東に蟄居し、失望落膽將に凡夫に化し了らんとしたる際、那智の瀧にて荒修業をしてゐた傑僧文覺上人が源家の昔を語り、熱腸より迸り出づる火の如き訓戒を垂れたので、天成の偉材茲に始めて心眼開き、眠れる獅子は奮然起ち上り、源家の旗を擧げるに至つたのである。實に文覺上人の獅子吼は頼朝に大轉機を來した。

織田信長は父信秀の葬式の折、喪主でありながら長柄の太刀脇差を注連縄でぐる〳〵卷にし、髪はボウ〳〵と亂れたまゝで袴もはかず抹香を一つかみ投げて一拜して歸つた。信長の臣下は皆はら〳〵とした。心ある重臣は、織田家の末路にあらずやと痛嘆した。遠來の客は「信長は聞きしにまさる大馬鹿者よ。」と嘲つた。信長の師として仕へた平手中務政秀は、切々の情を以つて諫めたが、少しも改めない。萬策盡き政秀は遂に切腹し、血を以て諫めた。時に天文二十二年正月十三日信長十六歳であつた。電感、信長の心中を打ち、眠りは俄に覺めた。聞きしにまさる大馬鹿者も、痛恨悔悟血涙を流し、天を仰いで嘆息し、斷じて政秀の血の諫死に添はんと堅く決意し、爾來彼は全く別人となり、眠れる獅子は覺め、遂に二十七歳の時桶狹間に於て駿遠參三國の大將二萬五千を率ゐる今川義元を鼻譃を譃ひながら單騎本陣に突擊し、天才的なる奇勝を博し、一躍天下に雷名を轟かし、室町幕府の末路、天下麻の如く亂れた所謂戰國時代の戰塵を收め、海内統一の曙光を招いた英雄となつた。眠れる獅子を覺醒し、大馬鹿者を一躍英雄兒となしたのは實に政秀の鮮血の諫止であつた。

此の鮮血の諫止無くんば、獅子は永久に覺めず、日本統一の曙は來らず、日本歴史は大いに變つたらうと思ふ。米人オリソン、スウエット、マーデン博士の或る著書の中に次の如き寓話がある。

或る奥山で、獅子の母親が一匹の子獅子を連れ、ブラ〳〵散歩に出掛けた。暖かな靜かな

日和とて、母獅子は居眠りを始めた。子獅子は獨りで前へ前へと歩み出し、遂に山外れまで行つて歸路を失ひ、迷兒となつて了つた。如何に悲鳴を擧げても、母の姿は見えない。恰度其處には、數日前子を失つた羊の母親が居て、迷へる子獅子を憐み、之を我が子として害に連れ行き、非常に愛憮して育てた。子獅子は日夜に大きく生長したが、周圍に感化せられ、獅子たる事を忘れ、羊の如く柔和になり、母子共幸福な靜かな月日を送つて居た。或時山の彼方に大きな一頭の獅子が勇姿を現はし、房々した立髪を振つて、谿谷に鳴り響く獅子吼を發した。母の羊は驚き自分の窖に隱れて了つた。然るに、不可思議なる哉、この獅子の吼聲は子獅子の心底の琴線に觸れ、俄かに靈火に打たれた如く、未だ嘗つて經驗せざる大なる新しき力を自覺せしめた。子獅子は此の時滿身凛々たる勇氣に滿ち、足を大地に力强く踏みしめ頭髪を高くもたげ、彼の山に向つて全く自然的に始めて獅子吼をして應答した。一旦目覺めた子獅子はなつかしげな眼で母羊を見やりながら、一目散に向ふの山の獅子の方へ飛び去つて了ひ、再び母羊の許には歸らなかつた。これまで犬や狼にも恐れをなした子獅子は、獅子吼のために俄に目覺め、心神大轉機をなし獅子兒たるの自覺を喚起し、直に森の王と飛躍したのである。

何と云ふ意味深き比喩だらう。凡て人間には獅子性がある。卽ち萬物の靈長たる性がある。幽學の所謂天地の和の別神靈たるものを本來具有してゐる。然るに多くの者はこの靈寶を自覺せずに、惰眠を貪つて居るのだ。若し此の人性に大いなる衝動を與へ、活力を與へ、靈火を與へたならば、獅子兒の自覺を爲すに相違ない。學問も修養も結局する所、この本具の靈性を覺醒するにありと思ふ。此の自覺無くんば、縱ひ千萬卷の書籍を讀むも、幾多の修養談を聞くも、これ死學問、死修養に過ぎない。獅子兒を羊の如く甚寢させては何の効力もない。

大原幽學の心神上の轉機を見て特に其の感を深くする。

第三章　幽學の指導原理

徳川三百年間の一偉觀は、博學達識の儒者學徒林の如く輩出し、各自門戸を張り、盛に哲理を說き、人倫を談じ、古今の諸說を究明論評し、以て日本文化に一大貢獻をなした點である。

然れども、此等の儒者學者は大抵、孔、孟、老、莊又は其の流の學說を根據として自己の立脚地を立てたるに過ぎず、獨創の天地を拓き、一家の學風を建て、獨自の歩を爲したるものは至つて少い。

唯一人幽學は、是等諸儒先哲の歩を辿らず、神儒佛の蘊奥を探究し、其の長を採り、華を集めたとは云へ、其の根本に於ては自己獨特の一派を創立し、頂天立地獨自の歩を爲した點に於て慥かに時流を拔き雲表に聳えて居ると考へられる。

彼は遺著「徵味幽玄考」に「神儒佛の三道に於ても、陰陽消長の自然に離れたるは無し。

然るに、三道に於て偏し、或は嘲り、或は打ち、毀たんとする者あれど、人の心を直くする德あるに於て、是を敵とする者出づれば、これを助くる者出で毀ち遂ぐる事能はず。唯其偏執最負の名の出づる而已……」「三道の中に於ては、少しにても偏る風情にては必ず廣きに出づる事なしと、其の道々の博識の達者皆謂へる所也。今の世に、三道入り交はりて、上も保く下も安からしめ給ふてぞ、尊ぶべきことなり。是を尊まざるものを見るに、少しく耳目の明き初むるや否や、己が學ぶ道の外は唯嘲けることのみ多く、是がために其の德を廣く施すこと能はず。……」「三道の中は、何れを學ぶとも、唯偏執の志を去り、其の自然の理に離れざる事大事なるべし」と喝破して居る。これ當時は神儒佛の學徒が徒らに自己の道に偏し中を失ひ、他の排擊にのみ汲々として憂身をやつし、道を得んとして却て之を失ひ、人を教へんとして却て自ら迷ひ居る迷蒙を慨し、道は偏すべからざることを戒めた彼獨自の信條である。これ彼が卓然として時流の儒者學徒を拔きたる所以である。

幽學の哲理は、人の性に對する彼一流の信念に存する。彼は自著「幽玄考」の初めに、性を唱へて「それ性の大いなるや。」と劈頭讃嘆し、次に、「天地の和卽ち性、性は卽ち天地の和にして其儘なる者なり」と云ひ、人の性が天地の和と一體なる所以を述べ「蓋し人は天地の和の別神靈の長たる者故、天地の和の萬物に之き及ぼす如くの養道を行ふこそ、人の人たる道とす。其の本は君臣、父子、夫婦、昆弟、朋友の內に在りて、末四海に及ぼす事に至る。其の近きは時々刻々の勤むる行にありて、遠くは幾千歲の後に及ぼす事、猶際限あるべからず。」と唱へ、性の近くして遠く、微にして廣大無邊なる幽玄を說き、道は近きにあり、近きにあらざるは道にあらざるも、この近き道は卷いては天地を包み、延べては幾千歲に及ぶべき奧義を說いてゐる。

又、同書に「中庸の首章に所謂『天之命之謂レ性、率レ性之謂レ道、修レ道之謂レ教』、此の性、道、教の三の之の字をユクと訓じて以て其の幽玄を明らむるとせば先づ萬物自ら生じ、自ら育はるゝ所以を知るべし。故に、之の字は天の陽氣の萬性に之き和する所以を指すなり。」と云うて、東洋の大經典「中庸」の首章に對し獨自の見解を下して居る。天命の人に其の儘ユ

キ及ぼーたる姿そのものが人の性で、卽ち性は天命と同一體である。これ彼が「夫れ性の大いなるや」と讃嘆した所以である。

然らば　彼の主張する性の基因たる天地の和とは何ぞ。天地の和の意味する幽學の思惟、理想の內容如何、これは幽學ならでは十分に言說し難き所ではあるが、自分は自分だけの解釋として、次の如く考へる。

中庸の「喜怒哀樂の未だ發せざる、之を中と謂ふ。發して皆節に中る、之を和と謂ふ。中は天下の大本なり。和は天下の達道なり。」に付き幽學は此の「中」を「幽玄考」に次の如くいうてゐる。「中とは天地の和する所以に基きて、其の獨りを愼み、以て人慾の私のきざしなき事をいふ。是れ卽ち天下の大本にして大極たる所以なり。天下の大本とは天地の和其の儘の事をいふ。もし中を眞中と解する時は、必ず六合に彌る心と解すべきなり。」と云ひて、眞中を六合に彌る心と解して居る。

「六合に彌る中」これ哲學者の言ふ主客分裂以前の絕對的の中ではないか。古來傳ふる如き大に偏せず小に偏せざる常識的な中位の如き相對的の中を指すものではあるまい。この中は、天下の大本にして大極であり、天地の和其のまゝであり、絕對で完全無欠な姿であり、之を宗教的に說明すれば、眞中は其儘神である。これ幽學が中を指して六合に彌る心と云つた所以であらう。

この眞の「中」が發して皆節に中る、卽ち神が自ら生々發展し、現實の世界に自分の姿を啓現し、主觀と客觀とが對立し、而かも「皆發して節に中る。」卽ち喜怒哀樂が皆神のリズムに合致して、眞善美の諧律をなす、この崇高な世界、幽玄神秘なる境地、これが眞の和であらう。故に「中庸」に「中和を致し天地位し萬物育す」というてゐる。天地を位置づけ萬物を化育する力、卽ち絕對の力が此の中に內在し、和に包含せられてゐる。これ大宇宙の生命にして且つ其の生々發展の相である。

幽學が「天地の和は天地に滿ちて則ち無極也。故に大極は無極にして大極也と謂へる幽玄を能く味ふべし。性、道、敎の三則ち是れ也。」といひ又「天地の和は象見えず、鬼神と稱す、

夫れ鬼神は欲する事も無く、作す事も無けれども、萬物成る。」と云うて、天地の和の絶對性を明らかにしてゐる。

これ「中庸」に「鬼神の德たるそれ盛なるかな。之を視れども見えず、これを聞けども聞えず、物に體して遺るべからず。天下の人をして齊明盛服して以て祭祀を承け、洋々乎として其の上に在るが如く、其の左右に在るが如くならしむ。詩に曰く神の格る度るべからず云々。」と同一。これ思索したる神、概念化せられたる神にあらず、生ける神である。全能の神である。靈と靈と相通じ魂と魂と相交り感應自在の神である。即ち、天地の和其自身生ける鬼神にして、天地萬物、森羅萬象之れにより生々發展する。即天地の和は神にして、人は天地の和の別神靈なる故、神の子である。これ幽學が性に對する哲理にして、彼の人生觀である。彼の使命觀の出發點である。故に、彼は「性は所謂天地の和なれば、下愚と雖も道心なき能はず。」と喝破し、「下愚と雖も五行も五常も備りある者故、其の勤に怠る事無ければ、育ひ導く事の至らずといふ事なし。愚者や盲者を歩かしむる事能はざる者、何ぞ道の廣きと云はむ。其相應に導きて、能く歩行せしむるこそ大道たるへし。亦是を能くするには、信だにあれば、其相應に誰にても行ふ事出來る道なり。且つ天地の和の別神靈の性也。」と彼一流の信念を吐露し、階級思想の下積となつた山村水廓の農夫野人の中にも、人たるの性、即ち天地の和の別神靈の長たる姿を發見した。封建時代、士にあらずんば人にあらずと見做されたる世に於ては正に驚天的大卓見といふことが出來よう。然かも、「愚者や、盲者を歩行せしむる事能はざる者、何ぞ道の廣きと云はん。」とまで揚言せる所、其の信念の烈々たる、當に古今獨歩ともいふべきか。

キリストが「一片眞の信だにあらば、此の山に移りて彼の海に入れといふとも、その如くなるべし。」と云はれたのに髣髴たるものがあらう。

彼は天地の和の別神靈の具體的の姿を孝道に於て見出し、孝道を以て天地の和の根本的のものと認めて居る。

彼は云ふ、「私を去つて所謂天地の和する所以に基づき、父母のために勤めよ。人も我も共

に父母のために勤めんと志して以て行ひ勤むべし。其の志を以て勤めて、父母の悅ぶを見る毎に、必ず我身を顧るべし。是に至つては、人心の發するも、道心の發するも、己れが心の發する微味幽玄、掌を指すが如く知れるなり。故に少しにても心に穢あれば行ひ難く勤め難き所以をも尙能く知れる也。是れ己れの心を磨きながら幽玄を學ぶ所以也。是等を能く知れる時は行ひ勤むる心法自ら能く定まる也。」

「天地の和する如く行うて、以て父母を樂しましむる事を廣く大にせんと志すに於ては、……君臣、父子、夫婦、昆弟、朋友の交りに至るまで分相應の禮自ら立つものなり。」

「君に忠を竭し、親に孝を盡し、夫婦相和し、朋友相信じ、兄弟相愛するは天地自然の義にして、是に背きたるは天地自然の義に背きたるものにして、不義の甚しきものなり。」

彼は孝を讃嘆して「嗚呼孝行は尊き哉」と崇め「父母の悅ぶ顏を見て樂しむ人の面持は物靜かにして、何となく位備はるものなり。庶人と雖も士めきたる味ひあり、嗚呼孝行は尊き哉」と讃美し、孝子は其の風貌まで移り、高貴の相現はれ庶人に於ても典型的の武士の如き感がするとまで揚言してゐる。

これ天地の和の人に之き及ぼしたる聖姿にして、人の道の實踐躬行の極致といふべきであらう。

第一章　幽學の理想鄕

第一節　幽學東總の地をトす

幽學が下總國香取郡長部村（現在中和村）遠藤本藏の書院を假道場に充て、一代の教理を講じたのは、天保より嘉永の間所謂天保水滸傳の時代で、北總の地は飯岡の助五郎、笹川の繁造等の亂鬪の舞臺であり、博徒の跋扈、長脇差の横行、ゆすり、强盜の公行、人倫は廢れ、風俗は頽れ、道義は地に墜ち、正に一個の修羅場であつた。

幽學は自己畢生の理想鄕を、何故かゝる處に建設せんとしたか。地を選び、風俗を選び、時を選び、所謂天の時地の利人の和に應ずる、先づ第一に著目すべき所なるに、彼は却つて天の時も地の利も人の和も一蹴し、人倫衰微風俗頽廢の中心地をトして自己の使命實現に着手した。

順境は凡夫を生じ偉人を殺す。激浪は弱者を泣かし强者を歌はしむ、天の大任を授くるや、先づこの試鍊を下す。逆境却つて隆盛の因となりしか、長部を中心として、幽學を慕ひ來りて學ぶ者は、潮の如く押し寄せた。彼の理想鄉は着々發展し、旭日冲天の勢となつた。然らば其の理想鄉とは如何なるものか。凡ての精神事業は其人の人格の反映である。幽學の事業を見んとせば、先づその人格性行につき一瞥する必要がある。

第二節　幽學の人格性行

一、幽學は異性に對し品行端正なり

幽學が自己の經典とする中庸の「身を修むる所以を知れば、則ち人を治むる所以を知る、人を治むる所以を知れば、則ち天下國家を治むる所以を知る矣。」に則り、先づ身を修め、品行を正した。彼は婦女子を玩弄物視し、又は單に家名永續の道具と見做した時代に於いて、女子の地位を認め、其の人格を尊敬した。彼は十八歲家を出る際、父より民家に子孫を遺すべからずとの申付を受けたが、それを堅く守り終生妻帶することなく、品行端正、修道僧の如く身を處した。

二、幽學禁酒の範を示す。

酒は人生の修養風俗の改良のためには、百害あつて一益なきものである。幽學が濟世救民の天業に關して、禁酒を勵行したのは卓見である。殊に文化程度の低級野卑の地方に於いて禁酒を斷行したのは、驚くべき事である。

幽學が禁酒を實行したことについては、次のやうな言ひ傳へがある。幽學も始めのうちは少量の酒を用ひたが、門人等から「少量の酒は呑んでも差支ないか、」と問はれたので、彼は沈思默考の末、「自分が寢酒を飲んでゐながら、最愛の彼等に飲むなといふのは不合理だ。さりとて、若し彼等に飲酒を許すとすれば、彼等の子孫を始め門人全體の寢酒を禁ずる譯には行かなくなる。已れ先づ禁酒の範を示し、然る後門人等に勸め、會合の席上には幽學の自筆の禁酒の幅物を壁間に掲げて戒となし、遂に冠婚葬祭に至るまで徹底的に勵行せしめた。今

日に於いても長部の部落民は依然冠婚葬祭には酒を用ひないといふ。其の感化の深きこと驚くべきものがある。

三、 幽學人生觀を確立す。

幽學が十八歳の時、大和の一劍道場を破り、一身を危うせんとした苦き經驗に鑑み、飜然として意を武に絶ち、學理の究明と心神の錬磨に轉向し、爾來儒に行き、神に赴き、佛に就き、或は大自然に接し、最後に高僧提宗和尚の一喝によつて、靈眼開け、天人一如の人生觀を確立し、茲に衆生濟度の指導原理を建設した。（此の點第二章說述）

四、 無私無慾の人、

無私無慾、これ聖なるものゝ眞の姿である。人を救ふも、世を濟ふも、國を治むるも、其の要諦は此にある。一點私心私慾あらんか、他の美德は悉く光を失ふ。

北條泰時が明惠上人に治國平天下の道を乞うた所、上人は唯一言「無慾」と答へた。泰時は之を守つて時艱を濟うた。

西鄉隆盛が天下の人望を一身を集めたのも彼の無慾によるといはれる。南洲は「子孫のために美田を買はず」というたが、幽學は子孫すら作らず、從つて美田の必要もなかつた。全く彼は無私無慾で門弟に接したから、弟子の方でも悅服せざるを得なかつたのだ。

幽學の元旦の所懷に次の歌がある。

いへもたぬ身の初日こそめでたけれ
どちら向てもふさがりはなし

曇りなき心のままを鶯の
初音に空も明け渡りけり

彼の無私無慾天空海濶の心懷が躍如として居るではないか。

五、 慈眼愛腸の人。

幽學は天性銳氣峻峭、嚴厲果敢であつた。然し、彼は同時に石をも溶かす熱腸の持主であつた事は見逃すべからざる處である。

（一）「口まめ草」には幽學が天保元年三月十六日、七年目に再び師僧提宗和尚に面會したる折、師が「汝予が如く隱者に陷ることなくして、世に道を傳へ吳れよかし」といつたので、「師の其志ありがたく僕感涙に堪へかねて、言を出すこと能はず、唯伏して心中に承受するのみ」と告白して居る。師の一言に咽び顏を伏し言を發し得なかつた子供の如き感性があつたのである。

（二）、幽學が澤庵の尾と株を副食物に麥飯を食するのを見て、門弟が何故澤庵の中身を用ひなさらぬのかと問うた處が、幽學は中身と好物は戸棚にあるが、それは二人衆が來訪した時饗應するのだと答へたので、門弟は感涙に咽んだといふ。

（三）、或る時幽學は門人本多元俊、宇井包高等四人を連れ、椎名某を僕として、奥州旅行をした事があつた。四名の者は各自の土産物を椎名某に荷はしめた。ところが、次第に其の品數が增して椎名某の苦しむのを見ると、幽學は其の一部を自分の風呂敷包に入れ、夜宿につくと窃に椎名某に渡し、十數日間斯うして旅をつゞけて行つた。聽て四名は之を知り、深く恥入つて、幽學に謝したといふ。溫情滾々として盡きざるものがある。

（四）、幽學は換子教育を奬勵して、我が子を溺愛して教養方法を誤らざる樣にした。その「子供仕込心得之捷」に「家内中の者、預りし子、かわゆくなり、人目を忍び落涙する程の情なければならぬ事。」「唯情の深き事が極上なり。」と主張し、教育の根底を愛に置いた。然かも、人の子に對し可愛くて落涙する程の愛を要求した。大教育者ペスタロッチーに劣らぬ心境である。

以上は一端を例示したるに過きないが、彼は確かに慈眼愛腸の持主である。唯武士氣質として容易に喜怒哀樂を表に現はさず、剛志の蔭に燃ゆる愛腸を藏した。故に一度幽學と膝を交ゆるや、忽ち其の慈眼愛腸に包容せられ、敬慕措く能はざりしといはれた。

無情の英雄は破壞である。多情の英雄は大過を招く。不動の剛志と石を熔かす熱腸、この兼備あつて始めて眞正の人物といふことが出來る。幽學は正にこの種の人傑だ。

六、幽學門弟の靈的活力の源泉となる。

教育者指導者の根本的要素の一は、教導せらるゝものに、行動の精神實行の原動力を與ふる事に存する。千言萬語を費し聽者を感動せしむるも何等實行に移し得ざる時は、其の價値幾何ぞ。識高く學深きも、學ぶ者に行動の活力を與へ得ざる時は、其の價値幾何ぞ。單に學識を高め見聞を博めしむるのみにて、之を實行の意志に出でしめざるときは、決して眞の指導教化とは云はれまい。

此の點に於て、幽學は斯然群を拔き、吉田松陰に髣髴たるものがある。彼叫ぶや周圍は跳り、彼熱するや周圍は燃え、彼陣頭に立つや周圍は躍進する。彼の居る所、雰圍氣は一變し新精神は湧出で、勇氣は生れ、希望は生じ、思想は高められ、情操は清められ、遂に彼等を根本的に改造せざれば止まない所があつた。實に彼は靈的活力の源泉であつた。

七、幽學は何事にも徹底的なり。

彼は皮相、生半可を極度に排斥し、自分の周圍に來り學ぶ者に自己の生命を徹底的に吹込み、之を指導した。

彼は父への一諾を徹底的に守り、生涯他國の君主に仕へず、且つ異性に對し純潔を保つた又一度酒の害を知るや、已れ先づ禁酒を斷行し、然る後之を門弟に勸め、遂に冠婚葬祭の際に於いてまで之を廢止し、積年の陋習を一變した。

彼はこの精神を禮節風習作法には勿論、手拭の模樣、下駄の鼻緒の作り方にまで及ぼして、種々の改革を行つた。然も、自我的小鑄型に嵌め込む如き固陋に陷らず、凡て神人合一の境地より織り出したものである。從つて、感化薫德の深きこと、正に深淵大澤に臨むが如きものがあつた。

以上、幽學の人となりを概略述べた。然らば、この人によつて築かれた理想鄉は如何たる內容特質を有するものであつたか。

第三節　幽學の敎育

一、庶人に天地の和の姿を發見す。

「微味幽玄考」の緒言に、道を學ぶに必要なる書を讀んだ者は世に數へ切れぬ程多くあるが、言はゞ、口先丈けの學者に終り、眞の道を學び、完全に理解したものは、殆んどないといふ程少數である。此等は一定の心法無く、善惡の標準明瞭せざるによる……。我が國に於て、心法の自然に備つて居るものは武士及びそれ以上の人である。然し武士以下の一般庶人にても、心の置き場所さへ正しければ、其の地位身分才能に應じた心の法則は自ら備

はるもので、眞に道を學び得ない理由はない。其の理由を明らかにせんが爲に本書を書いたとの旨趣を述べてゐる。

當時武士階級以外の一般庶人を極度に輕視した時代に、敎育の如何によりては、これ等一般庶人に天理人道を了得せしめ得ざる理由なしとて、その心底に武士同樣の何物かを認め、かゝる見地に立つて、彼は文化低く道念薄く自覺心乏しき田夫野人の中に自己の理想の建設を企畫し、これに邁進した。

ソクラテスがアゼンスの路傍にて市民を指導し、千古に歌はれたるが如く、キリストがガリラヤ湖畔の漁夫を門弟とし、彼等の働きにより永遠の眞理を世界萬邦に傳へたるが如く、幽學は山村僻遠の田夫野人を理想鄉實現の對照とした。實に彼は路傍の一輪の花も、大厦高樓に飾らるゝ名花も、植物の美を誇る點に於ては差別を認めざるのみか、却つて自然のままの野花に眞の美を見出した。

中庸に「君子の道は費にして隱なり。夫婦の愚も以て與り知るべし。其の至れるに及んでは聖人と雖も亦能くせざる所あり。」

又「君子の道は端を夫婦に造す。其の至れるに及んでは、天地に察かなり。子の曰く道人に遠からず。人の道を爲して人に遠きは以て道と爲すべからずと。」

即ち日常生活に於ける夫婦の道にも、幽玄微味な眞理あり、聖人君子と雖も窺ひ知り難き不可知境ある事を幽學は味つたのである。キリストが天を仰いで「天地の主なる父よ、われ感謝す、此等のことを智き者、慧き者に隱して嬰兒に顯し給へり」と、申されたと同一である。彼が一般庶人の中に天地の和の別神靈たる尊き姿を見、彼等が大地に打込む鍬の一振にも、天地の和の幽味を認め、彼等農夫の作る名も無き花にも、天地の和の姿を認めて、彼等を對照として、理想鄉實現に志したのは、卓見といふことを得よう。

二、分相應器量相應の敎育

幽學研究者の權威高木千次郎氏は次の如く說述して居る。

「分とは自然にして天命に屬し、相應とは作爲にして人道に屬す。此の自然の天分により之に相應したる行爲をなすを謂ふなり。分とは中庸に所謂誠は天の道なりと言ふ語に相當し相應とは之を誠にするは人の道なりと謂ふ語に相當するものなり。故に分相應と謂へば、天道と人道とを總稱する言葉にして、分相應の行を爲すと言ふ事は卽ち吾人の行動にして、天道たる自然に合致せしむる事を意味するものなり。……

凡て人が眞正の獨立を希望し、自主せんと欲せば自己の本分を知り、之に相應したる行を爲さざる可からず。分相應を知らば、卽ち成功の秘訣を知るものなり。……

同時に人の行動を天道に適合せしむるものなり。……

其の本分を知り、而して之に相應したる行動を爲すは人生の極地なり」と。

幽玄考には「天地の和の萬物を生育するも、人の人を導くも、漸く德積りて以て成る者にして、一朝一夕の事にあらず。分相應器量相應は天地相和する所以に基づき、信を盡す事に止む事無きこそ大事なる可し。下愚と雖も、五行も五常も備はりあるもの故、其の勤めに怠る事なければ、育て導くことの至らずと云ふ事なし。」

又「仁義禮智の四ッ、信より發せずといふ事なし。且、信を以てして此の四つ成らずといふ事なし」とある。卽ち、教育の大本を分相應器量相應に置き、且つ天地の和する所以に基きて、信を盡す事にありとして居る。尙言ひ換へれば、天道に則り、人道に基き、被教育者の賢愚才不才等、生來の特色氣質等を十分識別參酌し、之に教育者の仁義禮智信を推し廣むる事を以て教育の本義と爲して居る。これが幽學の分相應、器量相應の教育である。幽學が「愚者や盲目者を步行せしむる事能はざる者何ぞ道の廣きを言はむ。其相應を導きて能く步行せしむるこそ大道なるべし。」と喝破し、「馬術を習ふに就いて、蹄の響きに元氣の出で、手綱も其の拍手に能く氣に入り、馬も乘る人の心が靜かであり、意氣が盛んなので、步む拍手は靜かであるが、元氣は大いに盛んとなる。斯うなると、蹄の響きも拍手が付き之が乘る人の心に通じて、兩方共に心は靜かで動じないが、勢は益々盛んとなつて、兩者の調和こそ自ら龍虎のやうな勢を發揮するに至る。是に於て乘る人の心が馬に通じ、馬の氣持が乘る人

にわかり、靜かであると同時に盛んである。人を教育するには相手の心持の中に自分が這入つて行く、而も自分の立場を忘れずに熱心になる事が肝要である。」と述べ、

乘者と馬と一心同體となり、鞍上人無く鞍下馬無し、と言ふ境地が馬術の奥の手である樣に、教育者も被教育者と一心同體となり、相互の心と心とが通ひ、魂と魂とが融合して行くに於ては、如何なる愚者にも器量相應に天地の和の別神靈たる自覺を與へ得べく、又盲者と雖も歩行せしめ得べしといふにあるべく、これ決して誇張にあらず、彼の教育者としての確たる信念の發表である。

吉田松陰、ペスタロッチにも劣らぬ幽玄の境地である。

從つて、彼の教育は決して生半可なものではなく、嚴格峻嚴を極めた所謂硬教育であつた。

先づ幽學の門に入りて就學する者は次の樣な神文を差入れさせられた。

神　文

一、此の度私共性理學道友に御加入被二成下一難レ有奉レ存候然る上は少しも我意申間敷候且己が愚を恥らひ秘置候事迄も無二腹藏一明し合ひ心の穢を洗ひ道を學ぶ事に候得ば互に可レ恥事抔道友の外妻子に至るまで猥りに爲二語聞一間敷其外朋友の信義急度相守可レ申候若し相背くに於いては三神の御罰を蒙るべき者也依而神文如件

年號　月　日　　何村　何の某　爪印

大原先生

次に神文式（宣誓式）に參列させ、天地神明に誓つて師弟の誼を結んだ。

神　文　式

神文式は午前二時頃萬籟寂たる深夜參列者一同入浴して服裝を更め襟を正しうし禮儀を慎しみ師の面前に進み出で邪念を去り邪思を拂ひ一心不亂に道心を修むべき事を誓ひ神文狀に皆記名爪印した。

神文式終るや幽學は左記十三ケ條の心得を一同に讀み聞かせた。

一、さあまづすんでよかつた

一、これからいよ〳〵道學稽古の始めなる事
一、己れが心に道を積み上ぐるくせを付る事
一、道を以てする事は早速は分らぬ事も多けれども後に行く程善のあらはるゝ事
一、目前の事に氣をうばはれ間斷事
一、道に違つても一度は是非がない二度はしかたがないを恐るゝ事
一、學びが一日やすみになるのあやふき事
一、百里行くとも一足づゝでなければ行かれぬ事
一、十度や二十度はやめるより外しかたがなき樣な氣が出る事
一、進む時もありねつから氣のはいらぬ時もあれども學びは其內に有る事
一、少し出來るとたいそうに思つて慢心する事

教權の强固なること、教義の嚴肅なること、寮閑氣の崇高なること、他に類例ありや。

三、改心樓の創築

幽學畢生の事業たる性學は、始め座談の形式にて之を布教したが、改心樓が出來てからは、講演の形式を用ゐる樣になつた。

四、男子大會

幽學は毎月十七日改心樓に於て男子大會を開き、此の日には先づ門弟の兒童をして、袴を着け、壇に上り、その「微味幽玄考」を朗讀せしめ、次に先輩門弟等をして之を講話せしめ、最後に幽學自ら中庸の一節を講じ、其の他忠孝の美德、親子兄弟夫婦朋友間の美事善行の講話、竝びに勤儉貯蓄の奬勵をした。

毎年正月の大會には、幽學自ら中庸の首章「天の命之を性と謂ひ、性に率ふ之を道と謂ひ、道を修むる之を敎と謂ふ。」の句に付講話をなし、十二月の大會にはその著「規式解」により、七五三繩、松、竹等の道德的意味を詳解し、以て新年を迎ふべき精神的準備を爲さしめた。卽ち年の終りには一年を回顧反省し、年の始めには精神を改め一年の計を樹てさせた

男子大會には壁間に必ず幽學自筆の三幅對と二幅對とを掲げた。

三　幅　對

第一幅、吉しへ、國道無き時は、母と犯し、子と犯し、或は親を殺し、或は惡神の爲に命をとられ、無きからを衢に積みしとぞ。恐れ多くも、天照皇大神は、其天の下に哀憐をたれ給ひて、或は罪の罪なる事を定め、或は善き神達に命じて、惡神を平らけ賜ひ、唯々天の下を穩かならしむる事而已にあられしとぞ。其尊き事、天の下の神達の御魂に染み渡りて、皇大神御魂は卽ち八百萬の神達の御魂に移りおはします也。故に八百萬の神達も、亦唯々天の下の平らかなる事のみ禰ぎ賜ひしと南無。然して後は御祖々々の其御魂も、亦子々孫々の魂に移り座在す也。然は、今の世の人と離も、漸々其氣を稟け繼て以て生れたる者故に、其神靈も亦其身々々に居まさずといふ事無し。恐多くも今上天皇においても、御祖神を重しとせずして、釋迦而已を重しとする者にだに、人の心を安からしむるにおいては、是に官職を下し賜ふ也。斯も天下の民を憐み給ふにおいて、御代萬々歲たる者と南無。庶人猶私無うして、諸人の行末迄も安からしむる事に心を置程なれば、自ら作せる災ひ無く、天の爲せる孽ひは遁れ安うして、子孫を有つ事も亦疑ひあるべからず。此において御祖神の靈前に謹で拜すべき也。然るを、人慾の私の爲に神々を祈るは、其身に坐す神靈を穢すにあらずや。殊に今在します、親々の神靈までも踏み躙り、蹴飛す如き事而已するは、人面獸心にあらずや。是れ聊か人慾の私の爲に迷ひ、己れに求めて其の神罰を蒙り、生涯所謂修羅道に漂ふものなり。其の甚しきは、家も身も亡す也。故に必ず先づ己れは生れたる儘の直なる心もて親に事へ、他の人々迄も唯々安からしむる事に心を留むべし。予の友人達は朝な夕な必ず是を忘るべからず。嗚呼、懼るべきは、其身々々に坐す神靈迄も、踏み躙る如くに穢す事也。

第二幅、聰明叡智守之以愚　大馬鹿者是を守るに利口を以てす
功被天下守之以讓　世の人の嘲りてあふ是を有つに手柄顏を以てす
勇力振世守之以怯　柔弱未練是に陷るに握り拳を以てす

富有四海守之以謙　身上を亡す是をいたすに氣高きを以てす

第三幅、世の中に道たる事は偏らざる者なれども、道の明らかならざる人は偏りて、己が學ぶ道の外は或は誹謗し、或は嘲り、或は言ひ破らむとする者も有るべし。予が此の世を去つて後、人何程惡しさまに言ひなすとも、亦何方の道を學ぶとも、神と親とに事ふるを以て、家内を修むる一ツの事をば忘るべからず、捨つべからず。必々偏らずして、子々孫々迄も道に離るべからずとの傳へ、專一とすべき事をのみ賴置候。亦家々の人々は神にも聖人にもあらざれば、時として破るゝ事の有るは必定に候。若し過つて破れとなりし時は、それなりにして、唯々道をだに離れざれば、過却りて治りの善き種とならむ。自他とも然る也。

二　幅　對

第一幅、酒に醉ふべからず。

人の惡を探し罵るべからず。差出がましき行爲のあるまじきこと。饒舌すべからず。人の話は靜かに聞く可きこと。道友相互の誓約は必ず守るべきこと。

第　二　幅

道也者不レ可二須臾離一也　（中庸の句）

不レ語二怪力亂神一　（論語の句）

人心教化、道德涵養に對する熱誠只仰き服するのみ。尙幽學は次の如く一般的に男の心得を示した。

男　の　心　得

夫人（それひと）は、天照皇大神之御心にして、漸々と先祖父母に推移りて、其身生るるなり。然らば正敷を守り、忠孝を盡すは、人の人たる道とす。

一、男の魂は劍なり。故に物に迷ひ、言に違はば、忽ち身家を亡し、人の人たる通用なし。是が爲の守りなり。

一、帶は朝起きて父母の難レ有を不レ忘爲め、毛筋程の事をも、そむかぬ志を定め、其上に帶を結び、其の日を保つの守りなり。

一、羽織は禮服なり。紐は兩親の志を一つにむすび、是をむねにあてざれば、貴人へは相對ならぬ守りの事。

一、三度の食は、其度毎に先祖父母に事ふるの志を極め、命を保ち仕へる爲めに食事すること。

一、月は朔日、十五日、二十八日、其月々の勤めゆるまぬ樣、猶以て改める爲の禮日なり。

一、五節句は、節々の替る度毎に、猶又其志を愈々正敷、よそ事に走らざる爲めの式日なり。

一、兄弟朋友の交りは、父母の大事、其家を守り、其身を保つ正實を失はざる爲めなる事。

一、日日の耕作は、上へみつぎを獻ずるの勤め、且其田畑の作物生長を以て、父母の耳目を樂しましめんが爲めなり。附ては勝手の望み出る時は、忽ち道にはなれ、父母の志をもそこなふ事に陷るべし。萬物皆天地の和なり。人の命も、心も、天地の和より、父母の誠を以て生じたるものなれば、是をはなれて爲す事は、私したる事明らかなり。依レ之人一度して是を能くすれば、已れ是を十度すべし。

五、婦人大會

幽學は毎月十八日改心樓に於て定期の婦人大會を開いた。遠きものは夜明けに出立し、たとへ、風雨にも欠席者無く、遲刻者すら無かつたと言ふ。幽學が忠孝貞節の談、古今東西の貞女節婦の美德、果ては家政育兒の方法までも、懇切平易に說き去り說り來り、滿堂の女連は、情迫り感極つて、落涙せざるものなかつたと言ふ。當時に於て、斯くの如き婦人會を開き、所謂ホームの純潔を以て、理想鄉の基礎とした事は、驚くべき卓見である。果然幽學の德化の及ぶ所、貞操の純潔、家庭の和樂、親子の和合著しく、彼の理想鄉の根柢はいよ〳〵堅固となつた。彼は一般に次の如き女の心得を示した。

女の心得

一、鏡は女の魂にして、卿たりとも心にくもり出る時は、父母の志をも失ふ事故、是を以て正直を守る事。

一、髮結は、髮の毛の自由に成る如く、父母に不レ限、人々によく順ふは女の常なれば、結ぶ事。

一、かんざしは、父母の惠みの難レ有志を不レ忘爲め、髮に頂き守る事。

一、櫛は、髮の毛ねじくれる時は、心も共にねじくれるを恐れ、常にさし守る事。

一、べに、おしろいは、父母の爲には、諸人へけむい顏たり共、さしむけぬ守りの事。

一、居卷は、人、女の白はだ見れば、心くるひ、勝手なもの故、白布を以て正敷守る事。

一、帶は、紐解の言渡をよく守り、父母の志をそむく間敷事。就而は、少しの間も、父母の志忘るゝに於ては、かなしんで或はうかれわらつても、災ひを生ず。兎角父母の心をいたむる事の多きもの故、朝夕の守りこそ大事なるべし。

六、小兒會

毎月一回各小組合にて小兒會を開き、組合中の先輩が出席して、兒童をして幽學の書を讀ましめ、兒童の行狀を考査し、品行方正の者は表彰し、賞品を授與した。

七、修學旅行

幽學は旅修業、今の修學旅行を奬勵した。名所舊跡を訪ね、山川を跋涉して見聞を廣め、人情風俗を視察すると同時に、困苦、缺乏、疲勞、飢渴に堪へ、生きた學問を爲さしめた。

第四節　社會施設

一、社會的制裁起る。

幽學は天保七年大に感ずる所あり、後事を宇井出羽守、遠藤本藏、本多元俊等に托し、諸國遊歷の途に上つた。再び戻り來るや否や、誠に不明であつた。門弟等は幽學を欽慕し、離別の情禁じ難く、遂に一同誓約書を作り、爾今必ず師の教を守り、終生かはらざるを誓ひ、

師の復歸を百方懇請した。幽學も其の熱情に動かされ、再び戻り、永く北總の人と爲り、彼等を誘導する事を諾した。

連中誓約之事

御法度を堅く相守る儀は勿論、左の事は決して爲すまじき事。

一、博奕　一、不義密通　一、職行二重　一、女郎買
一、强慾　一、謀計　一、大酒　一、訴訟發頭
一、已れ儉約して人に損毛掛くまじき事。
一、疱瘡はやし、或は厄除、風祭、神事、祭禮、念佛の類ひにかこつけ、狂言、手踊、淨瑠璃、長唄、三味線の類ひ、總て人の心を浮かする所作。
一、初着祝ひ、紐解祝ひ、十五祝ひ、或は日待、庚申、子安講の類ひにかこつけ、酒類美味等一切慢すまじき事。

右に記す所は勿論、其外怪力亂神、或は分に應ぜぬ儀並に奢りがましき儀、或は危き商ひ、身の行ひ等致すに於ては、子孫滅亡致す所以の味ひ等を承知仕る上は、右體行ひ惡しき者有之節は、きつと諫言致すべき事。かくの如く議定致す上は、私共若し右體無道の行ひ仕る事於て有之は、何程嚴しく御誡被下候とも御受申し急度相慎み可申候。

萬一御誡めに相背き、或は浮かれ、或は激し抔して、右箇條の內ならずとも被致無道之行御人は致見捨義は亦相互ひの事に候。自分々々も亦於致無道之行は、御見捨被成、子孫迄滅亡候共、是全く自ら作せる過ちに候へば、御見捨の義、少しも御怨申すまじく、議定仍つて件の如し。

天保六年九月

南陽道人印
宇井出羽守印
遠藤本藏印
本多元俊印

外數十人印

時に天保六年如月、余一度此地を去る。其後北總道友一統相談の上、議定爪印せし由江戸表へ申送り、是に奥書を乞ふ。余則ち悦びて奥書するものなり。

奥書

夫れ民なる者萬々歳家名全くする事の及び難き所以は常に演べたる所なり。

堯舜文周の後すら、暗君の代となりて亡びたり。況んや我等の如き、言を殘すとも書き殘すとも、各々が子々孫々を何ぞ有たしむる所以あらんや。嗚呼定め無きは世のならひなり。然れども予が常に語る、我朝には萬代不易の御法あり。且天下泰平の御代なれば、各々が志によつて、永續の法則立つべし。其の所以は聊か五人十人の家内の者を修むる身分故、各々我朝の御法を慕ひ奉りて、道の爲めに功有る人の子孫は何さま宜しからずとも、我子に替へても信を盡し導く事相互ひにすべし。其互ひにする事三世の中廢せざれば、則ち家名永續の法則となるべし。然れども三世の中を廢せざるには、先づ面々の子を育つるに、道友の言は微しも背かずして、日々是を見せて以て子を育つべし。而して以て議定を能く守り、三代を過ぎ、是を四代に抑移さば則ち永續と成るべし。亦世の人は四代の中の危からざるを以て、議定を守る道友多く成るべし。以て萬々歳家名全かるべし。庶人に於て是に勝る孝行あるべからず。是等の方法も消滅する所以の多き事、數を知らず。其のあらましを以て萬通すれば掌を指すが如く悉く知れるなり。故に其あらましを記するものなり。必ず怠り無く常に能く押て知るべし。

第一には自分の身代を自分のみ好き勝手にせざる事。次には各々議定する所の箇條なり。又世に秀でたる富貴とならば、極めて危き事なく共、當時慢學發向故各々が子孫にも書を能く讀者出で、若し慢學に移らば、聖人の語を以て我意を演ぶる抔、果して法則を失ふ事もあるべし。是等類ひ證據を以て傳へ置きたる事故、余が無き後、道友の集會には必ず其の衆說を以て、余が一人の事をぶ選べし。然るに於ては、極めて余が十倍の智顯はるの事ある試し有り。故に必々微しも我意を用ふる事勿れ。必ず議定を堅固にし、

是を三代後に自然と押移るの外念ふこと勿れ、疑ふこと勿れ。世上に所謂傳授の微妙と云ふは、何れも皆常の言に有るものなり。故に余が常に語りし事毎を以て極むべし。

再　三

余が常に云ふ。各々思ふ所は其の子孫生涯思ふ事の種となるなり。然らば事は替ると雖も、意は其の子々孫々の心に其の儘に傳ふるなり。自分の身代も子供も自分の好き勝手にならぬこそ極めて永續の原なり。

右誓約は門弟等の自發に出で、幽學の指示に出るものではないけれども、幽學來遊以來、僅か數年を經過したるのみにて、斯の如く强固な團結が生れたのは、全く幽學の德化力の然らしむる所である。誓約書中、「萬一其御誡に相背きたる場合には、連中より破門され候共、聊も御怨み申すまじく、又無道を致すに於いては御見捨てなされ、子孫までも滅亡致すとも……御見捨の儀も御怨み申すまじく候。」とありて、門弟等が如何に熱心に道に眞劍に勵み、師を仰いだかゞ分る。斯の如く、門弟間より自發的に生れたる社會制裁は益々强固になり、永年浸み込んでゐた惡習は次第に打破され、良風美俗の建設大いに見るべきものあり。一波は他の波を起し、終には千波萬波將に天に漲らんとするの大勢を示し、理想鄉の前途燦として輝き、東總の天地は一變せんとした。

二、先祖株組織

祖先傳來の家を維持し、家名を重んじ、子孫永遠の策を講ずるは、我が國の特殊の美德であつて、實に國體の基礎を爲すものである。

幽學は茲に着眼し、先祖株組合を組織して、天保十年其筋の許可を得た。先祖株組合に加入せんとするものは、家族一同連署を以て申出で、土地又は現金にて金五兩を出資し、之を不動產として保管し、年々利子を蓄積し、一戶金百兩に達せざる間は、絕對に拂渡を爲さず、之を以て組合員相互の扶助財源とした。

其の規約內容は次の通りである。

爲取替置一札の事

一、金五兩分の地株先祖の株と定め少しも私の幕し方に取用ゐず、是を除き置き此の利分を永々積上げ是を以て爲令樂親先祖を此心掛同志の面々持寄一纏とし永世積み置く事。

一、組合其年々の利分は永々積上申すべき事。

一、其他株並に利分等世話人の儀は其時の一統相談の上にて相定むべき事。

一、此の誓約之内不仕合に付滅亡致す者有ゝ之候共此の除き株は一錢も相渡し申すまじき事。然れども一軒分に付百兩以上の株にも當る程に積上り候上は、若し滅亡致す事に相成候へば此說約中一統相談の上其半株を以て其家名相續すべき樣取立申す事。殘半株は其子孫のために積み置くべき事。之に依つて拾四ヶ條餘の議定に背き若し此の道友絕交致し候共此の除き株は一錢も相渡し申さず且一錢も請取申さず候事。

右の條々相樂み議定誓約候。

右の趣き私ども家内殘らず承知仕る事、實正に御座候、依ゝ之此の名前之者面々金五兩分の地株差出申候、然る上は私ども若し何程困窮仕るとも亦萬一滅亡致すとも此の道友義絕候とも、除き株は其儘差し置き一錢も請取申すまじく候、若し父子孫之世に至りて右除き株割返しは受取申さず候。

一軒分百兩以上之株と相成る迄は必ず相渡し下さるまじく候、百兩以上に相成上にて若し滅亡に相成る事に候へば御一統御相談の上にて其半株を以て相續を致すべき樣御取立賴み込み候、猶又萬一馬鹿者出來家名滅亡致し候共決して御渡なく其儘積置き相續相成るべき人物出來候節を御見立之上御取立賴み上げ候。後世のため爲取替一札仍て件の如し。

請取一札之事

各組合連名印

此度、面々親先祖を樂しましむるため此の道友中誓約致し候此のため貴殿よりも金五兩分之地株此の組合へ慥に加入致候、則ち議定之通り金百兩以上の株と相成る迄は何樣

の儀有レ之候とも營錢も相渡申すまじく候、尤も百兩以上の株と相成り節、若し滅亡致さるゝ事に相成候へば御一統御相談の上其の半株を以て相續相成るべき樣仕るべく候、後世のため一札依つて件の如し。

組　合　連　名　印

この先祖株組合は次第に隆盛に趣き、會員相互の生活の安固は勿論、良風美德の培養、惡風陋習の打破ともなり、理想鄉の基礎を經財的に盤石たらしむるものがあつた。

この先祖株は、幽學沒後今日に至るも、依然存續し、明治卅六年三月五日、時代相應に改訂せられた。其の趣旨を左に摘出しよう。

共有先祖株規約之趣旨

本會の有する財產は去る天保年中大原先生の創立せられたるものにして、吾人に於て實に尊重保護致すべきは勿論、凍餓死に瀕すると雖も、猥りに此財產を質入、抵當、賣買等を爲すものにあらず。如何となれば本會の財產たるや、祖先の膏血を注ぎ粒々辛苦の中に積立たるものなれば、我々祖先相續者たる者、大切に保護すべき義務こそあれ、決して解散、賣買、分取等爲すべき理由なきは明らかなればなり。加之ならず政府に於ても、現今は種々なる方法を設けて、共同貯蓄則ち本會の如き團體を設けて共同貯蓄の實を擧げしめんと勸誘するの時に當り、大原先生の先見あるや、遠く天保年中に於て、斯る團體を創立せらる、實に無上の幸榮なり。古語に曰く創立は易く守成は難しと宜なる哉。有終の美を遂ぐるもの世間に甚だ稀なり。幸に本會の如きは種々なる艱難を排除し、先輩諸氏の盡力に依り、五十餘年間繼續し來りたるものなれば、我々會員は大原先生創立の趣旨を貫徹し、先輩の遺志を繼ぎ、一層本會の隆盛を希圖せん爲め、茲に規約を締結致し一同捺印誓約するものなり。

三、共同購買の制度

門弟の使用する日用品は之を共同購入となし、一般に配布し、以て冗費を節し、價を廉ならしめた。